無い光

ハセガワアユム

ver.4.000

登場人物

後藤尚子（３２）
…　ライター。臨死体験ルポを雑誌で連載してる。

曽木朝人（４２）
…　尚子より年上だが、彼女のファンでアシスタントをしている。

川西陸夫（３２）
…　尚子の元同級生。事故で右手が麻痺して動かなくなりイラストレーター業を休業予定。

矢部内修美（３３）
…　同じく同級生。世話焼き。職業は教師。陸夫に対して優しい。

☒

＜シーン1＞

開場中、舞台上の部屋にはステレオとＣＤコンポがあり、
そこから音楽がずっと流れている。

客殿が暗くなっていく（暗転はしません）

誰かが、オープニングの音楽をかける。

照明転換　転換灯り

それぞれの登場人物が机の周りに座って行く。

誰かが音楽を小さくしていく。

尚子のアトリエ、兼、事務所。深夜。
テーブルの上で、ＩＣレコーダーが回ってる。
真ん中に陸夫が座って、みんなが囲んで話を聞いている。

照明転換　部屋の灯りになる。

陸夫　虹の中に、放り込まれたんだ。

間。

陸夫　本当にそう思った。…淡島通りから、代沢十字路を越えて…あの（淀む）

修美　鎌倉通り、

陸夫　そう、やだな、なんで出て来ないんだろ。鎌倉通りを曲がる辺りでスピンして。…ゲーム。よくあるじゃない？　ゲームセンターのＦ１とかの。あれにそっくり。ガガガガって。…ガガガガガって。……真っ白になって。

尚子　うん。

陸夫　（頷き）まるで虹のなかに放り込まれたみたいに暖かくて。

尚子　うん、

陸夫　その光が、だんだんと川の水面に変わって。俺は河原に居て、何故か裸で、その光ってる川をただ見てるんだ。

全員　……

陸夫　にゃーって、鳴き声がして。川の向こうに、飼ってた「はっさく」がいて。

尚子　（メモを見て）猫のはっさく、

陸夫　そう。それと、ばあちゃんも一緒にいて、その瞬間に、あ、これが、あの有名な川なんだって判って。

尚子　それで？

陸夫　…判ってるんだけど近づいてっちゃって。ああ、俺たぶん死ぬんだって。でもどんどん近づいてっちゃって

尚子　頭では判ってるんだよね、その川がなんなのかって。

陸夫　判ってても止まらなくて、

尚子　逆らえない？

陸夫　…気持ちよかったから。すごい気持ち良くて。解放された気持ちで涙が止まらなくなって…（昂ってしまう）

コップのなかの水が空になってることに気付く。

尚子　（曽木に）水。

曽木　あ、はい。

水を汲みに行く。

尚子　大丈夫？（録音）一度止めようか？

陸夫　大丈夫。（微笑み）何度も撮り直しごめんな（通りかかった曽木に）〆切危ないんすよね、

曽木　（愛想笑い）

陸夫　間に合う？

修美　まあ、間に合わなかったら、それはそれで、この前録ったのでも、

陸夫　（真剣に）尚子、間に合うよね？

尚子　うん。徹夜だけど（笑う）ね？（曽木に）

曽木　（苦笑い）

尚子、自分のコップも空だったことに気付き、汲みに行く。

尚子　ま、最終回だし、気合い入ってるから。自分の同級生がゲストってのも、生々しくていいって思ってるしさ。

陸夫　なまなましい（小さく笑う）

尚子　や（訂正）それだけ、誰かの救いになるってことだから。

陸夫　本当？

修美　しかもただの同級生じゃないかんね、「イラストレーター・川西陸夫」の直筆のイラストつきだからね。コラボ？

陸夫　そんな大層なもんじゃないよ。

曽木　そんなことないですよ、私の母校でも人気があって、生徒たちが陸夫さんのイラスト集持ってますもの。

陸夫　ありがとう。ま、でも、もう、これだから。

陸夫、右手を出す。彼の手は交通事故以来、麻痺して動かない。

気まずい、間。修美、陸夫が描いて来た「絵」を風呂敷包みから出す。

修美　でも、左手で、陸夫、描いたんだよ。すごいよね～。

陸夫　ちょっと、

修美　いいよいいよ（手を気遣って開けてあげる）ほら。

絵を見せる。左手で描いたとは思えないほど。
シュールな絵で、川と猫とおばあちゃんがある。

修美　（指差し）川……おばちゃん…猫、

曽木　はっさく！（笑）

陸夫　やめて（照れて小さく棒読み）

尚子　…すごいよ、左手で。（朝子に）預かっておいて。

陸夫　俺、この連載のファンになってから、ずっと励まされて来たし……悔いの無い記事にしたい。

修美　…うん、伝わってる。

陸夫　なのにダメだね、何度も話して来たことなのに、全然上手くならない。

尚子　（軽く笑い飛ばしてあげる）いいんだよ、別にうまくならなくても。…こっちでちゃんとまとめるし、それに、こういうのって何度も話す事に意味があるんだから。

尚子、陸夫に優しく話しかける。

尚子　何度か話していくうちに、その体験は、物語になる。物語になると、それが自分から少しだけ離れて、楽になるから。辛い事は、何度も話してみた方がいい。

陸夫　うん、うん（言い聞かせる）

尚子　続き平気？

陸夫、頷く。再びレコーダーで録音を再開する。

尚子　（メモを見直し）…だけど理英は、その光の川から、こっちに戻って来れたよね。

陸夫　（うなづく）

尚子　それはどうして、

陸夫　声がしたから。「陸夫」って。

尚子　うん、

陸夫　それで振り向くと、雲から一本の光の糸みたいなのが垂れてきて、それを掴んで声のする方に登って行ったんだ、

その動作をする陸夫。

陸夫　無我夢中で登って行って、・・・その声が誰なのか、やっとわかった気がする。

尚子　いままではお医者さんか、両親か、弟か、わかんないって言ってたよね、

陸夫　うん、でも、判ったんだ。

尚子　（身を乗り出し）うん、

陸夫　神様なんだって、

間。

陸夫　それくらい万能感があった。

全員　…

陸夫　おかしい？

尚子　（首を振る）ううん、大丈夫。

一同、微笑み合う。

尚子　最後の質問です。その光を感じてからあなたの人生観はどう変わりました？

陸夫　（涙ぐみ）…一生懸命、生きて来たつもりでした。だって、またその光を見たら、たぶん、向こうへ行っちゃうと思うから。

尚子　川の？

陸夫　そう。だから一生懸命。…それが上手く行ってたかどうかはわかんなかったけど。

陸夫、思わず泣き出してしまう。ティッシュを出す朝子。

後藤、レコーダーを止める。

尚子　ありがと。

陸夫　ううん、楽になった気がする。

修美　（理英の肩に手をやり励ます）よし、よし。…じゃ～（後藤達に）お疲れさまでしたぁ！はい、おしまい！

曽木　（尚子に）修美さんの話はいいんですか？

修美　いいのいいの、あたしのは、生まれつき内蔵弱いから、ガキの頃に手術で死にかけたって至って地味な話だから。

曽木　はあ、

修美　（陸夫に）めっちゃよかったぞ、最後の方もらい泣きしちゃったぞお。

尚子　結局あんた何しに来たの？

修美　応援？

陸夫　中学時代から、あだ名が「矢部内"世話焼き"ザ・グレート修美」だもんな。

修美　長い長い長い、プロレスラーじゃないないんだからっつうね

陸夫　（笑い）トイレ

陸夫、涙を拭きながらトイレに向かう。

見送る、修美。励ましの電波をトイレに送る。

曽木　せわやき？　…グレート？

修美　ああ、あたし、みんなよりダブっててね。病弱で中３の段階で一個ダブってるってあり得ないんだけど、自動的に大人にさせられて。だから、自主的にお姉さん役を演じて、クラスに馴染もうとしたのよね～、ある意味。だけどそれが、徐々に本当の自分になっていったっていうか。ふふ…

尚子　いま高校で教師やってるもんね。

修美　おう、

曽木　夜回りとかするんですか？

修美　まさかの毎日よ、

尚子　世も末だよね。

修造　いいのいいの！（キモく笑いながら）あたしはいつだって、自分の出来ることを全力でやるだけなんだって。この世はでっかい全力の集合体なんだぜ。（腕時計を見て）おおっ、何気にだな。（トイ

レの方へ）陸夫ー！駅まで送るからー！

尚子　そっか、もうそんな時間か。

修美　陸夫ー！

曽木　珈琲煎れてますけど？

修美　え、

曽木　結構いけるやつです、

修美　ありがとうございます～、でも流石に終電ヤバいんで。（戻ってきた陸夫に迫る）…なんなら家まで送ろうか？

陸夫　ううん、駅までででいい。遠いし、…まだ長時間、車は、

修美　（察して）ああ、そうだよね、ごめんごめん。

曽木　すみません、こんな辺境の地・八王子まで。

修美　八王子は別は辺境の地じゃないわよ～。

尚子　（曽木に）テープ起こし、先に始めててもらっててい？

曽木　はい。

曽木、奥の仕事部屋に去る。陸夫は、絵をじっと見ている。

修美　陸夫、行くよ、何やってんの？

陸夫　あ、これ、絵。ちょっと、足りないとこあるから。足していい？

修美　いま？

陸夫　うん、ホントあと少しだけだから、

修美　じゃあ…車とって来るから。

修美去る。

ドアの閉まる音。

鞄を漁る陸夫。

尚子、察してやり絵を持って来る。

陸夫　ありがと。

一本のロープを出す陸夫。

尚子　ええ？　何これ？

陸夫　雲から出て来た、糸。

尚子　ああ、

陸夫　迷ってんだ、こういう前衛的なのってビビるんだけどさ、やっぱ、どうしても。…手伝って。

尚子を、ロープを受取り巻き始める。

尚子　いいの？　こんなラフで。

陸夫　うん、偶然の産物がいい。

巻きながら、絵を眺める尚子。

尚子　左手でこんな描けるんだったら、…描きなよ。

陸夫　ううん、これが、最後だから。

尚子　…でもさ、

陸夫　決めたことだから。

ロープが巻き終わり、絵が完成する。

テーブルの上で微調整する陸夫。
それを覗き込む尚子。

尚子　…いや、陸夫の絵さ、よくフリーペーパーやＣＤジャケットとかで見つける度にいいなって。最近は雰囲気ちょっと変わったけど（事故の事を察して）いや、それでも陸夫っぽいなとは思ってたんだよ。で、クレジット見たらやっぱ陸夫でさ。

陸夫　うん

尚子　…会う事は無かったけど、見かけるたびに「生きてるんだな」って。いや…生きてるってのは、大袈裟だけど、元気でやってんだな、頑張ってんだなって、そんな、信号みたいなさ。

陸夫　やっぱライターは言う事かっこいいね、「信号」。

尚子　ははは、だから、ま、結構励まされたんだよね。

陸夫　・・俺も尚子の記事、よく見かけたよ。（思い出し）テレビブロスからＰＥＮまで節操ないなって、

尚子　あたしのは仕事だからさ〜。ゲージュツじゃないからさ〜、

陸夫　信号ね、…嬉しかったよ、

微笑み、ノートパソコンを取りに行く尚子。

陸夫　（絵を見てつぶやく）間に合った。
尚子　……青森帰るってのは、修美に話した？
陸夫　ううん、世話焼かれるから話してない。
尚子　じゃあ帰った後に、あたしからそれとなく言っておくから。
陸夫　追って来るかな、
尚子　そしたら結婚してやりな
陸夫　なんでだよ（笑）
尚子　付き合ってないの？
陸夫　ないよ、
尚子　ないんだ？
陸夫　ああ、・・・ない。
尚子　けどなんかそういう大人な関係的な？
陸夫　そんなんでもないよ（笑）
尚子　修美、かわいいなあ。

冷蔵庫から大量の薬を出す尚子。

リポビタンDで、おもむろにそれらを飲み出す。
サプリメントもあれば、常備薬もある。

陸夫　まー、クールな尚子からしたらかわいいよ。
尚子　クールなんかじゃないって、カラカラなだけ。砂漠だよ、
陸夫　言い過ぎ。
尚子　（おじさんのように笑う）
陸夫　でも修美には感謝してるんだ。同窓会で事故の事を話したら、尚子がこの連載やってること教えてくれて。楽になるんじゃないかって。…優しいよね。
尚子　…あいつ、あんたが初恋だったんだもん。
陸夫　え、ほんと？
尚子　同窓会で、また火が付いたとあたしは見受けてる。
陸夫　時間止めてたんだ。
尚子　いや、修美なりに人生はあったと思うんだけど。まあ、一周してさ。やっぱり、歳とっても残ってるんじゃない？　原風景っていうか。
陸夫　原風景か…

尚子を覗き込む、陸夫。

陸夫　ねえ、尚子がこういうの始めたのって、中３のさ、…屋上での…アレが原風景なの？

尚子　……うーん…そうかもね。

陸夫　（やや笑い）薬めちゃめちゃ飲んじゃうんだもん。

尚子　笑い事じゃないよ、まあ若気の至りだよね、

陸夫　あんとき、このまま本当死んじゃうかと思った。

尚子　修美が止めに来なかったら、本当にヤバかったからね。

陸夫　…なんで修美も屋上にいたんだろ？

尚子　「陸夫のことが好きだから」だって。

陸夫　やめろよお、それホラー。

陸夫、身を乗り出す。

陸夫　ねえ、自分のあのことは、記事にしなくていいの？

尚子　…自分のことはねえ、

陸夫　尚子は物語にしたくないんだ？

尚子　ん、

陸夫　ほら、自分で言ってたじゃん。話せば話すほど体験は物語になって楽になるって。

尚子　…そんな価値もないよ、あれは。

陸夫　……俺は、自分の人生が大事過ぎて吐き気しそう。

尚子　…

陸夫　へん？

尚子　（気遣う）変じゃないよ。

間。

陸夫　あ、（携帯に気付き、メールを確認する）

尚子　…修美？

陸夫　うん

陸夫、尚子に手を差し出す。

陸夫　いままでありがとう

試し読みしていただけるのはここまでです。

この続きは商品をご購入の上ご覧下さい。

無い光（おためしサンプル）

2011年8月26日　初版発行
2011年9月27日　改訂（ver.4.000）

著　者　　ハセガワアユム　　Ⓒ 2011年
発行者　　石村寛之
発行所　　有限会社レトロインク
〒181-0001 東京都三鷹市井の頭4-26-7
電話　0422-49-2903